

## 光は暗闇の中で輝いている（ヨハネによる福音書1章5節）

ゆっくり目を閉じていくと、暗闇が作れます。たとえ周りの光が強すぎる環境であっても、手で覆ったり、顔を伏せたり、カーテンを閉めたりと、意図的に闇は作れます。

そもそも世界の始まりは闇であり、「光あれ」という言葉によって、1日が昼と夜に分けられたと伝えられています。幼い頃、祖父母から、「夜は暗すぎて、読書ができなかった」と、聞いたことを思い出します。現代では、各部屋、各個人にライトが付くこともあるでしょうし、なんなら読書する端末デバイスが自ら光を放つこともあるくらいです。光があることが当たり前を感じられる時代なのかもしれません。

解釈を広げてみましょう。光は希望、闇は絶望の象徴として語られることがあります。何をしてよいのか分からない心の状況が、長いトンネルの中にいるような暗闇を表し、その遠くに見えた出口の方向に近づけば近づくほど、見える光が大きくなって、元気を取り戻していくといった描写が典型例でしょう。つまり、暗闇の中で輝く光とは、困っている人や、悩んでいる人や、弱っている人への優しさであったり、共感であったり、激励であったり、勇気であったり。そのように置き換えて考えることもできそうです。イルミネーションが、冬の寒すぎる夜空をワクワクする気持ちに変えてくれるのは、そういうことなのかもしれません。夏の夜だと花火ですね。

本校の目標である「光の子として歩みなさい」は、すべての“いのち”の幸せのため、人々と共に輝いて生きることのできる人に育ってほしいという願いが込められています。けれども、ここで私は少し心配になることがあります。

他者を輝かせる、すなわち元気にするということは、まず自分のコンディションが問われるのではないだろうか。今の自分は輝いているだろうか。周りの人を明るく照らすことができるだろうか。私は正直に言うと、自信ないですね。だけど、だからこそ、次のように考えることにしています。

「無理はしなくていい」

太陽の光は、エネルギーにギラギラと輝き続けます。そういう人って周りにいませんか？いいなあと憧れることはありますし、味方にいてくると心強いのですが、自分がその役割を担うのは難しいなと思ってしまいます。

では、月の光ならどうですか？月は太陽の光を受け、反射させることで、太陽が直接照らすことのできない場所にも光を届けることができます。個人的にはこっちの明るさの方が元々好きだということもあるんですが。この月が、雲や建物の陰などに隠れてさえいなければ、自らも明るく照らされるし、また誰かに希望をもたらすような存在にもなれているのではないかと考えますが、みなさんはどう感じたのでしょうか？

「光は暗闇の中で輝いている」 ――― これで聖句の紹介を終わります。